きだから、シニア向けのプライベート旅行プランナーやB&Bの経営、あるいは海外輸入雑貨を扱うような店はどうだろう。

しかし、50代半ばで、母が重い介護状態になり、百合子さんはかなりの時間を介護にとられるようになった。介護はおそらく定年後も続いているだろう。これでは夫婦で描いた仕事をすることは難しいかもしれない。妻には介護を優先してもらい、まずは自分が一人で始めるしかない。妻に介護を押しつけるわけではないが、妻を巻き込んだ仕事をするのは負担を増やすばかりと思ったのだ。

レンタルボックスは百合子さん選りすぐりのものばかり

まずはひとりビジネスから

そのつもりでいたものの、次第に利信さんの心に変化が起きた。早めに自分の道を踏み出したいという思いが生まれたのだ。利信さんは外資系事務機器メーカーで新商品開発や新規事業立ち上げなどを手がけてきた。「いわゆるモーレツ社員で、仕事に生き甲斐を感じ、組織で大きな仕事をすることに喜びを感じていました」と言う。

しかし、この状態で定年を迎えたら、その先には何があるのだろう。今、自分には多くの経験が蓄積している。ならば、その経験を活かし、ずっと働ける仕事がしたい。そう決意するや、早期退職を模索しはじめた。

利信さんは学生のころから実家の米屋の経理を手伝っていた。数字には明るい。それに会社では、ヒアリング、課題設定、解決案の提案、事業の推進といった一連の仕事の進め方を経験してきた。それらを活かせる仕事として選んだのがFPだった。早速、資格取得などの準備にとりかかった。

ただ、実現には難関が一つあった。「妻の説得です。それが私のFPの仕事第1号といえるでしょうね（笑）」。百合子さんも夫がやりたいことをするのが一番と理解を示し、利信さんは34年間勤めた会社を早期退職した。57歳だった。独立資金は退職金から300万円をあてた。

資格を取ったからといって、すぐに顧客が得られるわけではない。60歳までの3年間は修行期間と割り切り、特定の金融機関、証券会社などに属さず、単独で仕事を行う独立系FPとして仕事を続けた。顧客の獲得には妻も大きく貢献した。外向的で、友人が多く、営業センスもある妻が何人も呼び込んできてくれたのだ。

親が天国に行くのを待つことはやめよう

そんな二人が一緒に店を始めようと決断したのは09年の9月。利信さんは介護が終わったら、妻も好きなことができると思っていた。しかし、介護はいつ終わるかわからない。妻も歳をとっていく。ならば、「母親が天国に行くことを待つのはやめよう」と考えた。

そう思ったとたん、倉庫と化していた実家のデットスペースが宝に見えてきた。ここを二人の活動の場にすれば、上で何かあってもいつでも対応できる。そして生まれたのが「しぇあ～どぷれいす高井戸」である。

開店資金は基礎工事代と設備費で250万円ほど。レンタルボックスの利用料は月額2100円か2520円と通常よりもかなり低料金。仕入れも家賃もないから、棚が埋まればそれなりにやっていける。また、店の中央部は趣味の作品づくり教室、パソコン教室、会議などに使えるコーナーとして提供し、営業時間外には、セミナー会場、語学教室、ビデオ・映画鑑賞会、グループ打合せ、仲間との宴会などのスペースとしても貸し出す。

百合子さんは「夫が楽しくやっている姿をみていて、なんとなく不満な気分にはなっていました。だから、主人がゴーサインを出してくれた時は嬉しかった」と話す。

定休日の日曜日は産直ショップに変身